

令和
6年度

第66回 全国公立学校教頭会研究大会
第42回 四国地区小中学校教頭会研究大会
第50回 高知県小中学校教頭会研究大会

高知大会集録

ハイブリッド大会

大会主題

未来を切り拓く力を育む
魅力ある学校づくり

(全国統一研修主題 第13期2年次)

キーワード

自主・協働・創造

サブテーマ

夢と志をもち、協働して未来を創る子どもを
育成するチーム学校づくりの推進

開催
期間

令和6年
7月31日^水・8月1日^木

会場

全体会場：県民文化ホール(オレンジホール)

分科会場：ザ クラウンパレス新阪急高知・三翠園・サウズブリーズホテル
城西館・土佐御苑・高知商工会館・高知市文化プラザかるぽーと



全国公立学校教頭会

四国地区小中学校教頭会

高知県小中学校教頭会

全国公立学校教頭会研究大会 高知大会(ハイブリッド大会) 集録



目 次

◇ 開催要項	1
◇ 基調提案	2
◇ 高知大会の趣旨・研究協議の視点	3
◇ 記念講演 講師・シンポジウム	4
◇ 高知大会の様子	5
◇ 全国共通研究課題及び研究の視点	6
◇ 分科会提言テーマ	8
◇ 分科会指導助言者・提言者・役員一覧	10
◇ 分科会 研究協議	
第1分科会	12
第2分科会	16
第3分科会	18
第4分科会	20
第5分科会	22
第6分科会	26
特別分科会	27
◇ 次期開催県挨拶・次期大会紹介	29
◇ 高知大会を振り返って	30



7頭のクジラの群れは高知県小中学校教頭会7支部の連帯をイメージしています。バックのサークル上の波は、高知県に面している太平洋の荒波と教育現場の厳しい現状をイメージし、そんな環境でも雄大に泳いでいくクジラを教頭先生の姿と重ねて作成しました。

また、作成にあたり高知県安田町立安田中学校の生徒さんからいただいたアイデアを参考にさせていただきました。



年次別にみた研究大会一覧

昭和34年度	第1回	東京都	昭和51年度	第18回	愛媛県	平成5年度	第35回	新潟県	平成22年度	第52回	北海道
昭和35年度	第2回	鳥取県	昭和52年度	第19回	山梨県	平成6年度	第36回	北海道	平成23年度	第53回	和歌山県
昭和36年度	第3回	東京都	昭和53年度	第20回	北海道	平成7年度	第37回	奈良県	平成24年度	第54回	東京都
昭和37年度	第4回	静岡県	昭和54年度	第21回	兵庫県	平成8年度	第38回	山口県	平成25年度	第55回	大分県
昭和38年度	第5回	和歌山県	昭和55年度	第22回	岡山県	平成9年度	第39回	福岡県	平成26年度	第56回	秋田県
昭和39年度	第6回	熊本県	昭和56年度	第23回	鹿児島県	平成10年度	第40回	福島県	平成27年度	第57回	静岡県
昭和40年度	第7回	東京都	昭和57年度	第24回	宮城県	平成11年度	第41回	愛知県	平成28年度	第58回	徳島県
昭和41年度	第8回	宮城県	昭和58年度	第25回	三重県	平成12年度	第42回	香川県	平成29年度	第59回	埼玉県
昭和42年度	第9回	岐阜県	昭和59年度	第26回	徳島県	平成13年度	第43回	群馬県	平成30年度	第60回	北海道
昭和43年度	第10回	香川県	昭和60年度	第27回	東京都	平成14年度	第44回	北海道	令和元年度	第61回	滋賀県
昭和44年度	第11回	新潟県	昭和61年度	第28回	北海道	平成15年度	第45回	大阪府	令和2年度	第62回	岡山県
昭和45年度	第12回	北海道	昭和62年度	第29回	京都府	平成16年度	第46回	鳥取県	令和3年度	第63回	佐賀県
昭和46年度	第13回	滋賀県	昭和63年度	第30回	島根県	平成17年度	第47回	宮崎県	令和4年度	第64回	岩手県
昭和47年度	第14回	広島県	平成元年度	第31回	長崎県	平成18年度	第48回	山形県	令和5年度	第65回	石川県
昭和48年度	第15回	沖縄県	平成2年度	第32回	青森県	平成19年度	第49回	福井県	令和6年度	第66回	高知県
昭和49年度	第16回	岩手県	平成3年度	第33回	富山県	平成20年度	第50回	愛媛県			
昭和50年度	第17回	石川県	平成4年度	第34回	高知県	平成21年度	第51回	千葉県			



開催要項

主催

全国公立学校教頭会 四国地区小中学校教頭会 高知県小中学校教頭会

後援

文部科学省 全国都道府県教育長協議会 高知県 高知市
高知県教育委員会 徳島県教育委員会 香川県教育委員会 愛媛県教育委員会
高知市教育委員会 高知県市町村教育委員会連合会 公益社団法人日本教育会
全国連合小学校長会 全日本中学校長会 高知県小中学校長会
全国へき地教育研究連盟 公益財団法人日本教育公務員弘済会高知支部
公益社団法人日本 PTA 全国協議会 高知県 PTA 連合会 高知市 PTA 連合会

研究主題

「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」(全国統一研究主題 第13期2年次)
キーワード「自立・協働・創造」
サブテーマ「夢と志をもち、協働して未来を創る子どもを育成するチーム学校づくりの推進」

開催期日

令和6年7月31日(水)・8月1日(木)

開催方法

参集型・オンライン型を併用したハイブリッド大会

開催地

高知県高知市

会場

全体会場：高知県立県民文化ホール（オレンジホール）
分科会場：ザ クラウンパレス新阪急高知 三翠園 サウスブリーズホテル
高知市文化プラザかるぽーと 城西館 土佐御苑 高知商工会館

日程

第1日目 7月31日(水) オレンジホール

9:00	10:00	11:00	11:30	12:00	13:00	13:40	14:00	14:45	15:00	16:00
				受付	郷土文化 紹介	開会 行事	記念講演	シンポジウム		諸連絡

第2日目 8月1日(木) 各会場

9:00	9:30	10:00	11:00	11:50	12:40	14:00	15:00	16:00
受付		分科会		昼食		分科会	閉会 行事	

※オンラインの入室は9時からになります。

記念講演

講師：安藤 桃子 氏（映画監督）
演題：「想像と創造 ～地球のこどもビジョン～」

シンポジウム

テーマ
「夢と志をもち、協働して未来を創る子どもを育成するチーム学校づくりの推進」

コーディネーター：露口 健司 氏（愛媛大学大学院教授）
シンポジスト：藤原 文雄 氏（国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長）
田村 千賀 氏（株式会社 千クリエティブカンパニー 代表取締役）
谷 智子 氏（高知市教育委員会教育委員）



未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくりをめざして

全国公立学校教頭会 研究部

全国公立学校教頭会は、会員の資質を高めるための研修を推進し、教育の発展向上に寄与するとともに、会員の地位向上を図ることを目的に、昭和36年の改称以来60余年にわたり運営されてきた政策提言能力を備えた職能研修団体です。

全国公立学校教頭会の実践研究には、次の3つの基本方針があります。1) 学校教育の課題の解決に努めること、2) 副校長・教頭の職務内容や職務機能を追求すること、3) 研究成果を政策提言活動に生かすことです。これは、副校長・教頭として自身の持ち場で学校長の補佐役として課題の解決に努めながら、その過程において、個別具体的な課題をより研究的に、実践的に追究し、自身の資質・能力の向上や職務機能の充実を図っていくことを指します。全国各地で実践されている研究の積み重ねをより実証的に、科学的に練り上げ、エビデンスとして政策提言に生かすことも求めています。その実現のため、全国公立学校教頭会では、期毎に、全国統一研究主題を設定し、実践研究を推進しています。

生成 AI の急速な発展に代表されるように変化の速い時代を迎えています。少子高齢化問題、国際化によって起きる解決の難しい課題も山積しています。GIGA スクール構想の推進により、児童生徒の学び方、教職員の働き方、保護者、地域との連携の仕方等、学校現場にも大きな変化が起きています。

こうした情勢をふまえ、学校教育においては、「地域や社会に開かれた教育課程」を展開し、将来の予測が困難な時代において、たくましく生きる持続可能な社会の創り手として必要な資質・能力を児童生徒に育むことが求められています。その使命を果たすために我々は、副校長・教頭の職務内容の研究を通して力量を高め、国民の期待に応える魅力ある学校づくりに努めることが必要です。

全公教では、趨勢を見極めながら、実践的な研究を継続的に推進してきました。上述の研究の基本方針を踏まえ、教育課題を「教育課程」「子どもの発達」「教育環境整備」「組織・運営」「教職員専門性」「副校長・教頭の職務内容や職務機能」の6つの研究課題に整理し、「継続性(continuity)」、「協働性(collaboration)」、「関与性(commitment)」の3Cに焦点を当てて実践的研究を進めています。全国大会のみならず各地区ブロック、都道府県、郡市区町村教頭会・副校長会でも、全国統一研究主題に基づき研究活動を進めております。

第13期全国統一研究主題は、「未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくり」で、キーワードは「自立・協働・創造」です。本年度は2年次になります。

今回の高知大会では、「夢と志をもち、協働して未来を創る子どもを育成する学校づくりの推進」がサブテーマとして設定されています。未来を予測することが困難な変化の激しい社会であっても、子どもたちが未来に夢と希望、志をもつことができる学校運営の在り方、学校と地域が次世代を育てるビジョンを共有しながら共に高まり合う地域コミュニティの創造等を研究テーマとして、魅力ある学校づくりが検討されることと思います。

最後に、この研究大会に向け、長い時間と多大な労力をかけて準備された高知大会実行委員長をはじめ実行委員会の皆様の尽力に敬意を表しますとともに、単位教頭会・副校長会、関係諸団体の皆様、所属の校長および教職員等多数の皆様のご理解ご協力があって研究大会を開催することができました。心より感謝申し上げます。



高知大会の趣旨・研究協議の視点

第66回全国公立学校教頭会研究大会高知大会

サブテーマ設定の理由及び研究協議の視点について

1 大会主題「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」

(第13期 全国統一研究主題 2年次)

〈キーワード〉：自立・協働・創造

〔サブテーマ〕：夢と志をもち、協働して未来を創る子どもを育成するチーム学校づくりの推進

2 高知大会のサブテーマ

第13期2年次に当たる高知大会は、前年度の石川大会の研究の成果と、第13期全国統一主題及びキーワードの趣旨を踏まえて、サブテーマを「夢と志をもち、協働して未来を創る子どもを育成するチーム学校づくりの推進」と設定した。

私たちが生きているこの社会では、これまで以上にグローバル化やデジタルトランスフォーメーション（IT がもたらす変革）が進んでいる。また同時に、少子高齢化や地球環境問題などの多様な課題が進行しつつあり、先行きが不透明で予測困難な時代である。そのような高度化・複雑化する諸課題への対応をしながら、私たちが望む未来を私たち自身が示し、創り上げていくことが求められるようになる。

開催地である高知県は、少子・高齢化が進み、若者の県外流出等が過疎化の原因となり、小規模校の統廃合が進んでいる。また、都市部と中山間地域の教育環境が大きく異なり、それぞれに応じた地域の教育力を維持することが困難である。今後、地域の教育力を向上させていくためには、郷土への愛着と誇りをもち、グローバルな視点で高い志を掲げ、文化・コミュニティ活動等の分野で、地域の将来を担う人材が求められている。

こうした状況を踏まえ、学校は、地域社会の様々な機関等と連携することで多面的に子どもたちを育成することが望まれる。学校内外において、生涯を通じて学び成長し、主体的に社会の形成に参画していくなかで、様々な立場の人々と共生する社会を実現できる子どもを育てていきたい。そのためには我々副校長・教頭は、チーム学校の柱として現状を適切に分析して課題解決の方向性を見極め、他の教職員や地域とのコミュニケーションを基に目指すビジョンを共有しなければならない。そして、現状に満足しないで志をもってさらに高め合うことができる環境を創り出し、共に学び続けることで、成長できた喜びを実感できる教職員集団を育てていきたい。社会に出て自立して生き抜いていくために必要な資質・能力である「未来を切り拓く力」を育み、子どもと共に歩む教職員集団として「魅力ある学校」を創り上げるために、わたしたち副校長・教頭がどのように関与し、具現化していくか、追究していきたい。

3 高知大会研究協議の視点

(1) 「未来を切り拓く力を育む」学校教育を考える

高知大会においては、「未来を切り拓く力を育む」ことを「協働して未来を創る子どもを育成する」ととらえる。

学校ではICTの活用により、個別最適な学びが推進されていくなか、教師と学習者、また学習者同士が共に関わり合いながら成長することの価値や、学校内外で様々な人と直接関わる社会体験等がもたらす教育効果について、あらためて認識を深めることが重要である。そのためには、自然体験活動、スポーツ、文化芸術活動、異文化交流、地域社会への参画など、オンラインでは経験し得ないリアルな学びも大切にしていかなければならない。

副校長・教頭としてリーダーシップを発揮しながら「協働して未来を創る子どもを育成する」を進めていくために、どのような具体的な方策や取組が有効か、「継続性」「協働性」「関与性」に焦点を当てた実践研究を通して明らかにしていきたい。

(2) 「魅力ある学校づくり」を考える

高知大会においては、「魅力ある学校づくり」を創るため、以下の要素が不可欠だと考える。

①教職員が地域とのコミュニケーションを基に目指すビジョンを共有する学校

②現状に満足しないで志をもってさらに高め合うことができる環境を創り出し、共に学び続けることで、成長できた喜びを実感できる学校

③子どもと教職員、地域がやる気とやりがいを実感することができる元気溢れる学校

これらのことを達成していくために、わたしたち副校長・教頭が学校現場においてどのようにリーダーシップを発揮し、具体的な方策が有効か、「継続性」「協働性」「関与性」に焦点を当てた実践研究を通して明らかにしていきたい。



記念講演 講師・シンポジウム

記念講演

7月31日(水) 13:40～



@Tetsuo Kawashida

映画監督 安藤桃子氏

ロンドン大学芸術学部を卒業後、ニューヨークで映画作りを学び、2010年「カケラ」で監督・脚本デビュー。14年に、自ら書き下ろした長編小説「0.5ミリ」を映画化し、数々の賞を受賞。

その後、高知県に移住し、子ども達との映画作りやアートなど、食育、自然、農を通じ、優しい地域の地場づくりを行なう。

23年11月、映画を通じて心と文化を伝える「キネマ ミュージアム」がオープンするなど、多岐にわたり活動中。

父は俳優で映画監督の奥田瑛二さん、母親はエッセイスト、コメンテーターの安藤和津さん、妹は俳優の安藤サクラさん。

シンポジウム

7月31日(水) 14:50～

テーマ「夢と志をもち、協働して未来を創る子どもを育成するチーム学校づくりの推進」



コーディネーター 愛媛大学大学院 教授 露口健司氏

九州大学大学院人間環境学府後期博士課程修了(博士(教育学))。現在、愛媛大学大学院教育学研究科教授。教職員支援機構客員フェロー、国立教育政策研究所客員研究員、放送大学客員教授、兵庫教育大学客員教授を兼務。中央教育審議会「質の高い教師確保特別部会」委員。

著書は『子供の学力とウェルビーイングを高める教育長のリーダーシップ』『日本の教職論』『ソーシャル・キャピタルと教育』『学校組織の信頼』『学校組織のリーダーシップ』他多数。



シンポジスト 国立教育政策研究所 初等中等教育研究 部長 藤原文雄氏

民間企業、国立大学勤務を経て、2010年から国立教育政策研究所初等中等教育研究部総括研究官2020年より初等中等教育研究部長、2023年より教育政策・評価研究部長併任。教育データサイエンスセンターセンター長特別補佐も務める。専門は教育行政学。現在は、GIGAスクール構想実現に向けた調査研究、教職員等指導体制の見直しに関する研究に従事。

■ 経験した委員など

文部科学省中央教育審議会「チームとしての学校・教職員の在り方に関する作業部会」専門委員、文部科学省「質の高い教師の確保のための教職の魅力向上に向けた環境の在り方等に関する調査研究会」委員、中央教育審議会「質の高い教師の確保特別部会」臨時委員。



シンポジスト 株式会社 千クリエイティブカンパニー 代表取締役 田村千賀氏

高知リトルプレイヤーズシアター会長。よさこい工房～祭彩～代表。よさこい振り付け師。NHKよさこい解説担当。感性と想像力を養う表現ワークショップ講師として、芸術学園幼稚園、城南保育園、なはりこども園などで社会人講師として活動。



シンポジスト 高知市教育委員会 教育委員 谷智子氏

高知市立鴨田小学校・高知市立昭和小学校教諭、高知市教育委員会・高知県教育委員会勤務、高知市立一ツ橋小学校校長、高知市立愛宕中学校校長を経て退職。

高知市教育委員長、高知学園短期大学教授、高知大学客員教授を経て現職。



高知大会の様子





全国共通研究課題及び研究の視点

第1 課題（第1A分科会・第1B分科会）

教育課程に関する課題

【研究の視点】

- ◇ 信頼される学校づくりに資する「社会に開かれた教育課程」の編成・実施・評価に関すること（カリキュラム・マネジメント）
- ◇ 教育目標の設定と具現化に関すること
- ◇ 教科横断的な視点に立った資質・能力に関すること
- ◇ 教育課程の実施と学習評価に関すること
- ◇ 幼・保・小・中・高・特別支援学校の連携に関すること
- ◇ 小中一貫教育に関すること
- ◇ 家庭や地域との連携及び協働に関すること

第2 課題（第2分科会）

子どもの発達に関する課題

【研究の視点】

- ◇ 確かな学力の確実な定着に関わること
- ◇ 児童生徒の豊かな人間性の育成に関わること
- ◇ 児童生徒の健康・体力の増進に関わること
- ◇ 生き抜く力やこれから求められる資質・能力の育成に関わること
- ◇ その他、児童生徒の発達を支える教育課題に関わること

第3 課題（第3分科会）

教育環境整備に関する課題

【研究の視点】

- ◇ 児童生徒の安心安全に関すること
- ◇ 学校の施設整備に関すること
- ◇ 学校、家庭、地域との連携と協働に関すること
- ◇ 学校規模適正化に関すること
- ◇ 文書事務、経理事務の管理に関すること
- ◇ 教育の情報化に関すること



第4課題（第4分科会）

組織・運営に関する課題

【研究の視点】

- ◇ 学校運営全般に関すること
- ◇ 人材育成や組織力向上に関すること
- ◇ リスク管理や危機管理に関すること
- ◇ 地域連携（コミュニティー・スクールなど）に関すること
- ◇ 異校種連携に関すること
- ◇ その他、組織・運営に関すること

第5課題（第5A分科会・第5B分科会）

教職員の専門性に関する課題

【研究の視点】

- ◇ 教職員の専門家としての意識高揚に関すること
- ◇ 教職員の指導力等の育成に関すること
- ◇ 教職員の研修に関すること
- ◇ 教職員の服務に関すること
- ◇ 学校段階間連携を通じた、教職員の課題意識の向上に関すること
- ◇ 教職員の協働体制の構築に関すること
- ◇ 教職員の学校運営参画意識の向上に関すること

第6課題（第6分科会）

副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題

【研究の視点】

- ◇ チーム学校における職務内容に関すること
- ◇ 効率的な学校運営に関すること
- ◇ 教職員の働き方改革に関すること
- ◇ 教職員の支援に関すること
- ◇ 副校長・教頭候補者の育成に関すること

特別課題（特別分科会Ⅰ）

時宜に応じた課題

特別課題（特別分科会Ⅱ）

開催地の創意を生かした課題



分科会 提言テーマ

分科会	課題	提 言 テ ー マ	提 言 者
1 A	教育課程に関する課題	義務教育学校開校に向けた教頭の役割について — 教職員が主体的に取り組むためのカリキュラム・マネジメント —	岡山県 鏡野町立香々美小学校 井上 尚枝 美咲町立柵原学園 藤井英次朗
		連携型中高一貫教育の推進における教頭の役割 — 那賀地域中高一貫教育の取組を通して —	徳島県 那賀町立鷺敷中学校 本田 卓也
1 B		地域の特性を生かした魅力ある教育活動を目ざして — 小中連携教育を推進するための教頭の関わりを通して —	福岡県 行橋市立仲津小学校 服部 雅之
		魅力ある学校づくりにむけて教育課程の編成・実践評価 — 教職員の協働的な学び（授業づくり）及び児童への関わりを通して —	高知県 いの町立伊野小学校 萩野 真美
2	子どもの発達に関する課題	確かな学力の定着と心豊かな人間性の育成に係る教頭の関わり — 授業改善や学習習慣の改善、学校間や地域・家庭との連携協働を通して —	北海道 中標津町立 中標津小学校 阿部 俊介
		自己肯定感を育てる教育活動の推進と教頭の関わり — 生徒会・児童会連携を通して —	愛媛県 宇和島市立城東中学校 山西 秀樹
3	教育環境整備に関する課題	「自信をもって未来を切り拓くことのできる児童生徒の育成」を目指した教育環境整備 — 地域社会及び学校間との連携をさらに推進するための教頭の役割 —	秋田県 鹿角市立八幡平小学校 黒澤 真孝
		ICTを最大限活用し、デジタルのよさが実感できる教育環境づくり — GIGA スクール構想推進に向けての教頭の役割 —	香川県 宇多津町立 宇多津北小学校 濟城 智哉

分科会	課題	提 言 テ ー マ	提 言 者
4	組織・運営に関する課題	地域とともにある学校を目指すための教頭の関わり — 学校運営協議会の設立とその充実を通して —	茨城県 小美玉市立 美野里中学校 田山 恵子
		楽しい学校・学級づくりを目指す組織・運営の在り方と 教頭の役割 — 帰属意識を高めるトルネードマネジメントの実践を通して —	香川県 丸亀市立南中学校 岡野 隆伸
5 A	教職員の専門性に関する課題	教師の専門性を高め、学び続ける教員を育てるための 副校長・教頭の役割 — 鈴鹿市教頭会の取組から —	三重県 鈴鹿市立大木中学校 伊藤佳代子
		学び続ける教職員集団の実現に向けた効果的な副校長・ 教頭の関わり — 互いに高め合う集団づくりを目指して —	徳島県 三好市立池田小学校 山田 知弘
5 B		教職員の指導力向上をめざして — 教職員の専門性を生かす校内体制づくり —	滋賀県 長浜市立塩津小学校 兼房 広明
		メンターチーム会を活用した活力あるチーム学校づくりの 推進 — 若年教員の指導力向上を目指した教頭の役割について —	高知県 大豊町立大豊学園 溝渕 幸声
6	副校長・教頭の職務内容や 職務機能に迫る課題	〈全公教の調査結果分析と考察〉 学校組織マネジメントを推進する上での副校長・教頭の役割 講師：環太平洋大学 教授 浅野 良一 氏	
特Ⅰ	時宜に応じた課題	誰一人取り残さず、個々の可能性を最大限に引き出す教育の推進に向けた教頭の 役割 — 個別最適な学びと協働的な学びの日常化を図るための教育のDX化に向けて — 講師：東京学芸大学教育学部教授 博士(工学) 高橋 純 氏	
特Ⅱ	開校地の創意を 生かした課題	少子高齢化の地域におけるチーム学校づくり — 中山間地域における地域とともに取り組む学校づくり — 第1部 講師：高知県の町立伊野南小学校 校長 川上 確也 氏 第2部 講師：周南公立大学 教授 清原 泰治 氏	



分科会指導助言者・提言者・役員一覧

分科会	課 題	会 場	指 導 助 言 者		提 言	
			全公教顧問会	高知県	全 国	四 国
1 A	教育課程に関する課題	ザ クラウンパレス 新阪急高知	矢ヶ部哲也 山口 防府市立 大道小学校 校長	福井 佳織 高知市立義務教育学校 土佐山学舎 校長	井上 尚枝 岡山 鏡野町立香々美小学校 藤井英次朗 岡山 美咲町立柵原学園	本田 卓也 徳島 那賀町立 鷺敷中学校
1 B			服部 倫子 大阪 堺市立 深井小学校 校長	蛭子 穰 高知県教育委員会 小中学校課 課長	服部 雅之 福岡 行橋市立 仲津小学校	萩野 真美 高知 いの町立 伊野小学校
2	子どもの発達に関する課題	三 翠 園	佐光 隆 香川 直島町立 直島中学校 校長	山中 恵美 高知県教育委員会 人権教育・児童生徒課 課長	阿部 俊介 北海道 中標津町立 中標津小学校	山西 秀樹 愛媛 宇和島市立 城東中学校
3	教育環境整備に関する課題		尾崎 浩一 宮崎 宮崎市立 鏡州小学校 校長	田所久仁夫 高知県教育委員会 小中学校課 チーフ	黒澤 真孝 秋田 鹿角市立 八幡平小学校	済城 智哉 香川 宇多津町立 宇多津北小学校
4	組織・運営に関する課題	サウスブリーズ ホテル	稲上 敏男 北海道 札幌市立 清田小学校 校長	熊岡 彰 中部教育事務所 所長	田山 恵子 茨城 小美玉市立 美野里中学校	岡野 隆伸 香川 丸亀市立 南中学校
5 A	教職員の専門性に関する課題	土佐御苑	目時 聖児 青森 外ヶ浜町立 三厩中学校 校長	北岡 秀樹 高知市立 はりまや橋小学校 校長	伊藤佳代子 三重 鈴鹿市立 大木中学校	山田 知弘 徳島 三好市立 池田小学校
5 B		高知商工会館	矢野 渡 埼玉 春日部市立 緑小学校 校長	古谷 典子 高知県教育センター 教職研修部長	兼房 広明 滋賀 長浜市立 塩津小学校	溝渕 幸声 高知 大豊町立 大豊学園
6	副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題	高知市文化プラザ かるぽーと	〈 全公教の調査結果分析と考察 〉 学校組織マネジメントを推進する上での副校長・教頭の役割 講師：環太平洋大学 教授 浅野 良一 氏			
特 I	時宜に応じた課題	城 西 館	誰一人取り残さず、個々の可能性を最大限に引き出す教育の推進に向けた教頭の役割 ― 個別最適な学びと協働的な学びの日常化を図るための教育のDX化に向けて ― 講師：東京学芸大学教育学部教授 博士(工学) 高橋 純 氏			
特 II	開催地の創意を生かした課題		少子高齢化の地域におけるチーム学校づくり ― 中山間地域における地域とともに取り組む学校づくり ― 講師：第1部 高知県の町立伊野南小学校 校長 川上 確也 氏 第2部 周南公立大学 教授 清原 泰治 氏			

司会者 (全体司会)	記録者	運営委員	分科会 責任者	IT 担当	運営委員 (全公教)	分科会
窪添 文恵 高知 高知市立 秦小学校	林 香 高知市立春野中学校 三木 満喜 高知市立旭中学校	堀内 望 高知 高知市立 西部中学校	筋野 健治 高知 南国市立岡豊小・北稜中 希望ヶ丘分校	森山 貴雄 高知 高知市立 愛宕中学校	田口 牧 秋田 秋田県立 秋田南高校中部	1 A
富田 浩司 高知 いの町立 川内小学校	進司 克己 仁淀川町立池川中学校 久武桂津代 いの町立伊野南小学校	市川 謙二 高知 いの町立 神谷小中学校	逸見 誠 高知 大川村立 大川小中学校	塩田 文範 高知 高知市立 青柳中学校	鈴木 克明 栃木 宇都宮市立 晃陽中学校	1 B
弘瀬 佐和 高知 日高村立 日高中学校	堅田 和正 中土佐町立大野見小学校 秋田 喜俊 四万十町立北ノ川小学校	渡邊 敏記 高知 土佐市立 戸波小学校	岳本 由美 高知 南国市立 長岡小学校	白石 精治 高知 高知市立 潮江南小学校	牧田 隆 富山 富山市立 藤ノ木小学校	2
南 智恵 高知 奈半利町立 奈半利中学校	酒井 浩昭 馬路村立馬路中学校 小松 綾 北川村立北川中学校	細井 智香 高知 田野町立 田野小学校	池川 真妃 高知 南国市立 三和小学校	中西 純治 高知 義務教育学校 行川学園	木里 聡 滋賀 彦根市立 稲枝東小学校	3
宮川 昭二 高知 三原村立 三原中学校	山脇 浩一 黒潮町立三浦小学校 坂本 弘秋 土佐清水市三崎小学校	岩井 圭 高知 宿毛市立 宿毛小学校	江村 良顕 高知 南国市立 十市小学校	坂本 興彦 高知 高知市立 潮江小学校	楠本 勝美 岡山 岡山市立 旭東中学校	4
大山和歌子 高知 高知市立 横浜新町小学校	宇賀 孝司 高知市立昭和小学校 鈴木ゆう子 高知市立介良小学校	野地真由美 高知 高知市立 一宮小学校	楮佐古卓也 高知 南国市立 鳶ヶ池中学校	南 博子 高知 高知市立 第四小学校	矢板 仙子 埼玉 白岡市立 大山小学校	5 A
濱田実智雄 高知 南国市立 奈路小学校	松岡 佐記 南国市立久礼田小学校 森 和美 大豊町立大豊学園	中村 志乃 高知 南国市立 後免野田小学校	藤川眞理子 高知 南国市立 香長中学校	中澤 悠子 高知 高知市立 高須小学校	池原 鉄 沖縄 那覇市立 城岳小学校	5 B
山崎 雄功 東京 中央区立 佃中学校	楠瀬 正人 安芸市立赤野小学校 金子 理恵 東洋町立甲浦中学校	前田 康司 高知 室戸市立 室戸中学校		田部 和彦 高知 高知市立 横内小学校	荒川 宗近 埼玉 東松山市立 松山中学校	6
児玉 大 北海道 札幌市立 厚別南中学校	立仙 暁子 高知市立義務教育学校土佐山学舎 高橋 理加 高知市立鴨田小学校	森田やよい 高知 高知市立 朝倉中学校		青屋 憲介 高知 高知市立 潮江中学校	支倉 圭太 川崎市立柿生小学校 舘岡 信也 長岡市立阪之上小学校	特 I
宮村 知章 高知 香南市立 吉川小学校	北岡 隆一 香美市立大宮小学校 松山 修弘 香美市立舟入小学校	田村 由佳 高知 香南市立 野市東小学校	内田 裕文 高知 香美市立 山田小学校	名倉 亜季 高知 高知市立 江陽小学校		特 II

提言①

義務教育学校開校に向けた 教頭の役割について

一教職員が主体的に取り組むための カリキュラム・マネジメントー

岡山県久米郡副校長・教頭会

鏡野町立香々美小学校

美咲町立柵原学園

井上 尚枝
藤井 英次郎

【協議の柱】

小中一貫教育の編成を通して教職員が主体的に
取り組むための副校長・教頭の役割



1 提言者から提案された成果と課題

・成果

「各種教育・各教科等指導計画の作成」では、美咲町の方針に沿って作成物を確認し修正を加えたことは、教職員の美咲町の義務教育学校への理解にある程度有効だった。また、教務主任への「各種教育・各教科指導計画」の様式及び共通の表現方法の提案は、起案文書の差し戻しを減らし、教職員個々が主体的に取り組むために有効であった。

・課題

「各種教育・各教科等指導計画の作成」では、それまでの小中の取組が異なるため、具体的取組の作成に想定以上の時間と労力がかかった。改善点があれば柔軟に対応し、PDCA サイクルを回しながら、よりよい具体的取組が作成できるよう助言したい。新しく赴任してきた教職員への研修も必要である。

2 グループ協議報告（抜粋：小中連携について）

○道徳の時間に小中で乗り入れ授業を実施。生活・総合などのキャリア教育を進めるのが大切。

○知・徳・体の目標を設定し中間目標の見直しをする。

○若手教員に責任のある仕事を任せることが大事。

○負担感を感じる教職員に対し、教頭として見通しをもってもらう手立てをする。

○小中の文化の違い、温度差を解決するために小中合同研修会の実施。同じビジョンで教頭を中心にすすめる。

○教員の指導観のすり合わせも有効。

○生徒会・児童会を中心に連携。

3 指導助言（抜粋）

助言① 山口県防府市立大道小学校

校長 矢ヶ部 哲也 氏

地域・学校の特色を活かして、様々な「観」がある。課題（困ったこと）時間がかかる。動かすまでのエネルギー・時間がかかる。目に見える時間確保が大事となる。思い切った日程調整をして、先生方の計画的な取組につなげる。

「スクールミッション」明確したもののグランドデザインとして、「育てたい生徒像」「目指す学校像」「学校評価」等を公開していく。その達成のためにキーワードは「自分事」「つながり」。

教頭として、見取りと価値づけをしていく。いろいろなアイデアが生まれる土壌となり、学校運営への参画につながる。せっかくのこの機会をどう活かすのか。地域の方々にも活かしてほしい。是非、アイデアを教頭が言葉にして校長に提言をしてほしい。

助言② 高知市立義務教育学校土佐山学舎

校長 福井 佳織 氏

美咲町のミッションを担うという役割、大きな重圧がある。義務教育学校は平成28年から増えていっている。大きなメリットもある。開校までに数え切れない「初めて」がある。ないものから作る。そこにしっかり軸を入れている。

互いに文化の違いを感じている事柄には、教頭が、両方の意見を聞いてバランスをとって、ベクトル合わせが大事となる。教頭はエネルギーの源。マイナスから入ってはいけない。これをチャンスと思って、小さなことから、価値づけしていくが大切となる。

提言②

連携型小中一貫教育の推進における
教頭の役割

ー那賀地域中高一貫教育の取組を通してー

徳島県那賀郡教頭会
那賀町立鷲敷中学校

本田 卓也

【協議の柱】

持続可能な一貫教育を推進していくための副校長・教頭としての役割



1 提言者から提案された成果と課題

・成果

那賀地域中高一貫教育がマンネリ化しないように、各学校の委員と協働的に新しいアイデアを盛り込み、取り組んできた。

・課題

担当教頭が変わっても、取組を着実に積み重ねられるようにすることや、取組の形骸化を防ぐことが挙げられる。過疎化が進んでいる地域において、地域の特徴を生かしつつ中高連携のあり方について試行錯誤しながらの検証が必要であることも事実である。

2 グループ協議報告（抜粋）

○小中高の連携について

- ・総合的な学習の時間（防災教育・地域学習）持続可能な取組を進めていく。
- ・キャリアパスの活用（高3生の卒業時の変容を共有）
- ・生徒を活用して「いじめ防止」の取組を行う。地元の工業高校と連携し「いじめ防止」の缶バッジを作成し地元の小学校に配布した。持続可能な取組に至らなかった。理由は、先生方自身が見通しを持てず、楽しめなかった。軌道に乗るのは難しい。先生方に納得感があるように、原点に立ち返るようなウィンウィンな取組になるようにすることが大事。子ども

の成長が実感できる場があればやりがいがあるのではないかと。取組の内容を見える化することで、教職員の異動があっても持続可能となる。

○キャリアパスポートの取組について

2・3年周期で教頭は代わる。教育課程を調整して時間を作る。持続可能な取組のためにチームをつくり、負担感を減らし先生方の心に火をつける。

3 指導助言（抜粋）

助言① 山口県防府市立大道小学校

校長 矢ヶ部 哲也 氏

時代の担い手を育てることがミッションとなり、小中一貫はその時代の社会で必要な人材づくり

- ①学力（6年間）生徒の個別最適化な学びをつなげる
- ②個性の伸長（中高間の指導法の連携）
- ③地域を巻き込む 自己実現の学びの場

今後は、今まである特色を再確認し、再構築する。

- ①地域とつながった教育課程の創造（特色ある学校づくり）例：地域人材を部活動で活用する
- ②コミュニティ・スクールの導入（学校・生徒・保護者・地域にとって、大きな原動力）
- ③人材育成（出口を見据えた教育活動の実践）
- ④行政の取組を取り込む「つながる」「ボトムアップのきっかけ」見取りと価値づけ（承認・称賛）
「沢山のことを校長と共に歩いてほしい」
「教頭職」の強みは先生方と近い。地域・保護者と近い。いろいろなコメントがしやすい。

助言② 高知市立義務教育学校土佐山学舎

校長 福井 佳織 氏

異校種間をつなぐ大役は教頭先生。

那賀地域小中一貫教育の取組から

教頭を中心とした5つの委員会（教務・進路指導・人権教育推進・特別活動・生徒指導特別支援教育）

振り返りから、教頭が研究内容の計画を立案→各教頭が中心に実践→教頭が報告書作成（成果と課題検証）→PDCA 常に進化・挑戦→中高一貫教育を推進

成果と課題から、自信をもって取り組んでできていることが伝わる。

縦・横の連携（横は近隣の中学校とともに）

「子どもたちを まだ見ぬ輝かしい未来に送り出すために 教頭先生の笑顔が大切！」

1
A1
B

2

3

4

5
A5
B

6

特
1特
2

提言①

地域の特性を生かした 魅力ある教育活動を目指して —小中連携教育を推進するための 教頭の関わりを通して—

福岡県京都郡中学校教頭会
行橋市立仲津小学校（前みやこ市立伊良原中学校）

服部 雅之

【協議の柱】

地域の特性を生かした小中連携教育を組織的に
進めていくための副校長・教頭の役割



1 提言者から提案された成果と課題

・成果

小中教職員が協働的に関わることで、ねらいを共有した取組が行われた。また、小中連携教育を定着・推進でき「教職員内で認め合う」ことに効果が見られた。

学校評価の児童生徒の学習評価のアンケート結果から、小中連携の活動を通して、児童生徒の自信や意欲の向上が見られた。

・課題

学校の実態や地域の特色を生かした授業や個別最適な学び（学習支援）、学校行事等を継続可能に工夫していく必要がある。

令和6年から始まったCSを基盤とした「地域とともにある学校づくり」のために、地域の人材発掘や「ふるさとへの愛着と誇りをもつ」児童生徒を育成していきたい。

2 グループ協議報告

・学校規模はさまざまであるが、小中一貫教育については学校種により意識の違いがあるので、教職員どうしが繋がるが必要であり、教頭や主幹教諭等

の管理職が学期ごとに情報共有することが必須である。

- ・小中連携の際には、教頭職が主体となって互いの情報を共有することが必須であり、子どもを巻き込んだ取り組みも効果的である。また、小中連携の要となる人材を育成することも必要である。

3 指導助言

助言① 高知県教育委員会小中学校課

課長 蛭子 穰氏

- ・教頭職は、学校長のビジョンを所属教職員に浸透させるために、繋げる役割を果たす必要がある。そのために教職員の特性を把握したうえで教職員を活かすことができるように、教職員が相談しやすいことが必要である。
- ・小中連携に際しては、小中学校教職員の“壁”を意識することもあるが、同じ情報を持ち、情報の捉え方の違いを意識して、取組を繰り返すことで教職員の“壁”に対する意識を変革していくことが必要である。
- ・教職員の拠り所となるために、教頭職が元気であることが必要である。

助言② 大阪府堺市立深井小学校

校長 服部 倫子氏

- ・小中一貫教育には、教職員が9年間を通して育てるべき子ども像を明確にして共有することが必要である。
- ・小中一貫校としてのスケールメリットを活かすことが必要で、転入教職員と早い時期に情報共有することが重要である。
- ・教職員のヒューマンパワーを最大限に活かすために、仕組みを工夫することが必要である。
- ・やるべきことについては、教職員に事前の資料内容を提示することで浸透しやすくなる。

提言②

魅力ある学校づくりに向けて 教育課程の編成・実践評価 ―教職員の協働的な学び（授業づくり）及び 児童の関わりを通して―

高知県吾川支部教頭会
いの町立伊野小学校

萩 野 真 美

【協議の柱】

今日的な課題（学力向上・授業改善・個別最適な支援等）に、持続可能な組織を構築する副校長・教頭の関わり方



1 提言者から提案された成果と課題

・成果

取組を行う際に常に意識をしてきたことは「仕組み」と「仕掛け」をつくること。教職員に投げかける際は、「ロードマップ」「PPT 資料」「グランドデザイン」「チェック表」などを作成し、分かりやすく示すように心がけた。そうすることで、意義や見通し、管理職としての熱量を伝えることができる。また、可視化することは、取組の検証をする際に立ち戻る指標ともなる。初年度は教頭が作成していたものも、次の年には他の教員が行うというように、教員自身のものとなり、自走し始めている取組もある。

・課題

各担当と協力して取組を進めてきたが、教頭がリーダーシップを発揮しすぎると、OJT とはなりづらく、また、逆に任せすぎると取組が停滞してしまう。今後改善・検討が必要である。

2 グループ協議報告

・持続可能な組織をつくるには、全員が納得して進んでいく必要がある。そのために、明確化・スリム化

が必要。

- ・組織として教材分析をしているのはいい取組である。ただし、職員会を削減するなど、時間の捻出が必要。
- ・小中連携を行いたい、小中のシステムが違うので、全員が当事者意識をもつのは難しい。一緒に検討が必要。

3 指導助言

助言① 高知県教育委員会小中学校課

課長 蛭子 稯 氏

教師集団をどのようにするのか、いの町で進める4つのプロジェクトを学校で解釈し取り組みを進めている。校内研では養護教諭等も参加し、「学習者主体の授業とは一体何なのか」を多様な視点からともに考えることは大切。組織を持続可能なものにするには

- 1 取組はチームで行い、管理職の適切なフィードバックを行う。
- 2 エンゲージメントを高める。目指すべき方向をその都度教職員と確認する。
- 3 インセンティブとフィードバックを行う。こまめに評価をして、職員のモチベーションを高める。
- 4 プロセスと結果を可視化し、進捗管理を行う。一緒に考えて進めていく。

助言② 大阪府堺市立深井小学校

校長 服部 倫子 氏

ブロックごとに教材分析を行い、対抗させる方法を取り、教材研、授業研の行い方を変えた。これは、自分たちの学びを進めて、各々の実践力のアップデートに繋がっている。副校長・教頭は、学校長の経営方針を受けて、しっかりとイメージをもっておくことが大切。○適材適所でそれぞれを機能させる ○主担教員と共通理解を行う ○職員間の調整を行い、つなぐ ○構成メンバーの入れ替えを常に考えておく ○常に状況をアップデートさせる ○成功のイメージをしっかりとっておく ことが必要である。持続可能な組織を構築することは、永遠の課題であるが、教頭間同士で、よい事例を惜しみなく共有し、活用していく。「しんどい」という視点でなく、どこか「楽しいな」と思うところを見付けてほしい。

1 A

1 B

2

3

4

5 A

5 B

6

特 1

特 2

提言①

確かな学力の定着と心豊かな人間性の
育成に係る教頭の関わりー授業改善や学習習慣の改善、学校間や
地域・家庭との連携協働を通してー北海道根室管内教頭会
中標津町立中標津小学校

阿部 俊介

【協議の柱】

子どもたちの学力向上に関わる副校長・教頭の役
割

1 提言者から提案された成果と課題

・成果

「全国学力・学習状況調査」や「ほっかいどうチャレンジテスト」等を活用し短い周期で検証改善を行うとともに、教職員に対する研修を実施したことにより、授業改善が進み、令和5年度全国学力・学習状況調査において全国の平均正答率との差が縮まるなど、学力向上につなげることができた。

CS等と連携し、地域や家庭を巻き込んだキャリア教育やふるさと教育の充実を図ったことにより、児童生徒の学習意欲が高まったり、郷土に対する誇りや愛着が育まれたりするなど、児童生徒の心豊かな人間性の醸成に資することができた。

・課題

授業改善や児童生徒の学習習慣の改善に向けた取り組みを進めているものの、依然として全国学力・学習状況調査において全国の平均正答率を下回っていることから、検証改善サイクルの質を向上させ、より児童生徒の実態に即した適切な対応策を練る必要がある。

地域や家庭と連携協働した小中一貫したキャリア教育、ふるさと教育を実施しているものの、一部の地域に留まり全管内への波及が見られないことから、成功

事例を普及し、管内全体の取り組みとして充実させる必要がある。

2 グループ協議報告

- ・学力向上のための家庭との連携や中学校と連携した家庭学習強化週間はとても参考になる取り組み。
- ・教頭としての役割→必要とされる助言・アドバイスに全力で取り組む。先生方の良い面を伝える。→先生方の意欲につなげ、やる気を引き出す。(モチベーション、価値づけ)
- ・学力向上→複式学級が増え、若い先生が多くなっている状況。若い先生の授業力が課題。→教頭が中心となり、ベテランの先生と若い先生を繋げる。融合させる。

3 指導助言

助言① 高知県教育委員会 人権教育・児童生徒課

課長 山中 恵美氏

- ・小中連携から共通理解を図り、目指す児童生徒像、目指す授業を話し合うことが大切。
- ・活動は主体的に生き生きとしているが、学力としての成果は上がっているかを確認することも必要。
- ・児童生徒にとって魅力的な学校。学校で学ぶ意味について。各学校、教職員間で再確認を。
- ・学力の定着と豊かな人間性→生徒指導の視点。児童生徒主体活動。自己指導力の向上。

助言② 香川県直島町立直島中学校

校長 佐光 隆氏

- ◎学校課題に組織的に取り組むための教頭としての役割→学校長の学校経営(授業改善)ビジョンを理解する。
- ◎学校間や学校・家庭・地域をつなぐ教頭の役割→
 - ・地域連携のポイントは、全教職員の意識改革が必要である。子どもの様子を伝え合える関係。
 - ・校内外で「つなぐ」「まとめる」役割を担うとともに、教員のやる気を引き出す関係性の構築。
 - ・地域連携の「組織作り」のポイントは、既存組織の活用と人的資源の把握。

提言②

自己肯定感を育てる
教育活動の推進と教頭の関わり

—生徒会・児童会連携を通して—

愛媛県宇和島市教頭会
宇和島市立城東中学校

山西 秀 樹

【協議の柱】

自己肯定感を高めるための副校長・教頭としての
役割について

1 提言者から提案された成果と課題

・成果

教頭が児童会と生徒会の交流をコーディネートし、小学校の運動会や学習発表会の成功に貢献することができた。中学生の小学校の行事への参加や、市内6校の生徒会交流会による予土線応援プロジェクトや地域貢献を行うこと等、交流行事や地域の活性化を自分事として考え取り組んだことで母校、地域への愛着が高まった。取組によって自己肯定感も高まった。

・課題

今年度だけでなく、継続した取組とするための組織作りや様々な交流や取組を行っていくための予算の確保について、教育委員会をはじめ様々な関係機関との連携が必要である。

生徒会・児童会担当教員の意識は高まったが、今後は様々な方法で情報発信を行い、担当者以外との連携を充実させ、意識の高揚に努めていく必要がある。

2 グループ協議報告

- ・小中の異学年交流、地域貢献を自分事として活動し、努力し、役割を果たすことを認められ、ほめられることを通して自己肯定感を育て高めること、それらの連携における教頭の役割の重要性について確認で

きた。組織、活動の全体像やつきたい力、ゴールイメージを明確に持ち、対象、時期、内容等連絡、調整し、ベクトルを合わせ、人と人をつなぐ重要な役割が教頭にあることも再確認した。同時に継続的な取組とするために必要となることや教頭の負担感軽減、働き方改革との関連についても話し合うことができた。

3 指導助言

助言① 高知県教育委員会人権教育・児童生徒課

課長 山中 恵美 氏

- ・地域の活動への貢献、「ありがとう」といわれることが増える、自分が役に立っている、感謝されたという思いが自己肯定感の向上につながっている。
- ・目立つ子、支援がたくさん必要な子だけでなく、普段顔の浮かびにくい子にもスポットを当て指導・支援し、評価する。
- ・学級活動の活用・充実を図り、自分達の課題ややりたいことを子ども達で決めさせ、子どもに任せる時間と内容を決めて取り組ませる。その中で一人一人の伸びや変化を具体的に認める、ほめる。
- ・教頭の自己肯定感が自身のやりがい向上につながる。

助言② 香川県直島町立直島中学校

校長 佐光 隆 氏

- ・自己肯定感の育成には、児童生徒本人の努力、達成感、他者からの評価が関わり、示唆を受け止めながら他者との協働において自分の役割を果たしたことを承認されることで得られる成功体験が必要である。自己肯定感の高低は意欲や幸福感につながる。
- ・教頭の役割は場、お金、人の確保、ネットワークの構築、地域貢献の見える化、教頭どうしの地域のネットワークづくりと多岐にわたり様々な連携における教頭のマネジメントが大切になる。
- ・チーム学校として連携・協働するためには、専門性のある職員の配置や教職員の専門性の向上、地域、家庭との役割分担が必要。人材を選び、分担し任せることが大切である。
- ・健康第一。教頭自身の健康管理を大切に。

1
A1
B

2

3

4

5
A5
B

6

特
1特
2

提言①

「自信をもって未来を切り拓くことのできる
児童生徒の育成」を目指した教育環境整備—地域社会及び学校間との連携をさらに
推進するための教頭の役割—秋田県鹿角教頭会
鹿角市立八幡平小学校
(前) 鹿角市立柴平小学校

黒澤 真孝

【協議の柱】

持続可能な地域・学校間の連携づくりのための副
校長・教頭の役割

1 提言者から提案された成果と課題

・成果

①地域社会との連携

地域の方々と交流することで、コミュニケーション能力が高まり、ふるさと鹿角への愛着も高まっている。また、教職員にとっても地域のことを知る良い機会となった。そして、熟議では様々な立場の方に参加していただき、学校経営や地域活動の一助となった。

②学校間の連携

「ふるさとかづの絆プラン」では、ふるさと鹿角を広い視野で捉えて伝統継承など考える機会となった。また、小中・中中連携では、たくさんの刺激を受けることができた。

・課題

新たな交流活動を考えた際に、交流までの準備時間や相手方の要望と学校側のねらいとのすり合わせが難しい。また、活動の意味や意図を担当者や学級担任、児童生徒に伝える場や時間の不足、予算の確保など目的の共有化も難しくなっている。

2 グループ協議報告

継続性について、教育課程にどう位置付けていくかまた目的の共有化をどのようにはかっていくか。そのうえで、担当が変わってもその取り組みや活動が持続可能になるよう教頭間や学校組織、委員会、地域などとの引継ぎが重要になってくる。

関与性について、地域と結びつけるパイプ役、また地域の方にも学校と繋がっていくパイプの中心となる人物を探すことがこれからは必要になってくる。このことを含め、教頭が関与調整していくことが大事になる。

協働性について、地域コーディネーターや教務主任、担当教員などと役割分担をしたことを校長はじめ教職員へ共有し進めていくことが大切である。またそのことが、これからの人材育成にも繋がっていく。

3 指導助言

助言① 高知県教育委員会小中学校課

チーフ 田所 久仁夫 氏

年度初めの勉強会や地域観光資源の活用、伝統行事の維持・存続など地域の「人・もの・こと」を効果的に活用できていること、目的の共有についても、学校運営委員会の熟議で地域の思いや願いを知る機会となり非常に有効なことです。学校と地域がお互いに当事者意識をもって共通の目標に向かっていくことが大事です。そして、学校と地域が一緒になって子どもたちのために取り組むことを意識していただきたいと思います。

助言② 宮崎市立鏡洲小学校

校長 尾崎 浩一 氏

地域社会との連携の中で、様々なことにおいて教頭先生の負担は大きくなっていると思います。多くの負担がかかる教育活動は、業務の分担や教育環境の整備・工夫が今後必要になってくる。そして、継続的な予算確保とそれが持続可能な活動なのかなど視野に入れて考えていかなければいけない。今後、教頭として考えたとき、地域があって子どもがいてそして学校があるという考え方をもち続けていってほしいと思います。

提言②

ICTを最大活用し、 デジタルのよさが実感できる教育環境づくり ーGIGAスクール構想の教頭の役割ー

香川県綾歌支部教頭会
宇多津町立宇多津北小学校

濟城 智哉

【協議の柱】

GIGAスクール構想推進に向けての副校長・教頭の役割について



1 提言者から提案された成果と課題

・成果

端末使用機会の設定により、デジタルの良さを感じる児童生徒が増加した。

教職員への調査で、「児童生徒のICT活用を指導する能力」に関する項目で、肯定的な回答が前回は上回る項目が増えた。

自治体や町教育連携協議会との連携強化により、端末トラブルへの対応や端末活用への有効な取り組みが可能となった。また、校務支援ソフトやメール等の導入により校務の効率化につながった。

・課題

学校間で、児童生徒の肯定的な回答の割合に大きな差が見られたり、全国平均を下回ったりする項目がある。また、児童生徒の意識が低い項目は、教職員も低い傾向にある。

原因を分析し、改善に向けた取り組みを学校間で共有しながら推進したい。

学校や教職員間でICT利活用への意欲に差がある。課題解決に向けた取り組みの共有と提案、情報教育教員や外部人材等を活用した支援体制づくりを継続的にを行い教育の質向上につなげる必要がある。

2 グループ協議報告

- ・副校長・教頭の役割は、つなぐことがキーワードとなる。時間、場所、人、そういったところをどう繋いでいくのかを教職員の方にメリットとして、実感できるように推進していく。
- ・年度末とか年度初に、いつ、どこで、誰がどんな作業をやるのかをマニュアル化し、みんなでわかるようにして行きました。仕事内容を次へ引き継いでいくことが大事だなという話が出た。

3 指導助言

助言① 宮崎県宮崎市立鏡洲小学校

校長 尾崎 浩一氏

教頭先生の役割についてですが、私は先生方の話を聞きながら、若手教員をもっと活用したらいいと思います。若手の先生を使える、そういう時間なり雰囲気を作るのが教頭先生には大事なのかなと思います。

教頭先生がいろんなパイプ役をすることになります。全部を背負う必要はないのではないかと思います。得意な先生に得意なことをお願いする。そして若手と年配の先生方がうまく溶け合うようなものを作るのが大事な仕事になるのではないかと思います。

助言② 高知県教育委員会小中学校課

チーフ 田所 久仁夫氏

教職員の情報活用能力の向上についてですが、若手教員の活用というのは非常に有効ではないかと思います。ある小学校では、若手教員が中心となって、グループミーティングで各教室を繋ぎ、シンキングツールの使い方やアンケートフォームの使い方、端末の扱い方、情報モラルについて子ども向けに十分間の研修を行います。子ども達に対しての研修なのですが、実はその教室の中には苦手な先生方も一緒に見えています。実は子ども達と一緒に先生方もこの端末の使いかたを学んでいくということをやっていました。非常に良い取り組みだなということを感じました。

1
A1
B

2

3

4

5
A5
B

6

特
1特
2

提言①

地域とともにある学校を目指すための
教頭の関わり

ー学校運営協議会の設立とその充実を通してー

茨城県小美玉市教頭会
小美玉市立美野里中学校

田 山 恵 子

【協議の柱】

学校と地域の連携・協働を目指し、持続可能な学
校運営協議会の維持に向けた副校長・教頭の役割

1 提言者から提案された成果と課題

・成果

教頭が中心となって連絡・調整を行うことにより、教頭自身の当事者意識が高まるとともに、毎月行われる教頭会を活用して情報交換を行うことにより、各校の成果や課題等が教頭会内での共有が密にできた。

社会教育主事に教頭会に参加していただくなどして、教頭会と社会教育主事が連携を密にすることにより、活動や依頼が円滑にできた。

各校で学校運営協議会委員と教職員の合同研修会を行うことにより、それぞれの学校運営協議会への理解が深まった。

・課題

在校生保護者や地域の大学生など若い人材への参加推進に苦勞している。

教職員が数年で異動する中でも、学校運営協議会の活動を継続させていくために、学校運営協議会委員、地域学校協働活動推進委員、市社会教育主事との役割分担や連携方法について再検討する必要がある。

2 グループ協議報告

学校運営協議会有る学校とこれから始める学校があった。地域と学校が手を携えて教育活動をしていく。コーディネーターが教頭の役割になっている。その中で地域のニーズを取り入れることも大切である。教頭が、参加して下さる方と連絡し、支援のバランスをとることも大切である。毎年の話し合いで熟議をしていくことが必要である。

3 指導助言

助言① 高知県中部教育事務所

所長 熊岡 彰氏

協議会と協働本部の設置の背景には、これからの時代にこれまでどおりではなく多様な方に関わっていただくことが大きなメリットになる。設置が目的ではなく、CSも本部が一体化してくことで学校も地域も盛り上がっている事例を聞く。持続可能な取り組みを目指すには、教頭が担っているとは思えない。推進委員が仕事を担うことを聞くが誰でもよいわけではなく、学校と地域を結んでくれる最適な人材が大切である。また、様々なレベルでの研修が必要である。

助言② 北海道札幌市立清田小学校

校長 稲上 敏男氏

地域とともにある学校を目指した、持続可能な取り組みが大切である。地域と学校は、貸し借りの関係ではお互いに疲弊していく。お互いに役割分担をすることでwin・winになる。学校は経営ビジョンを熱く語り(校長の役目)、地域の方の力を借りる。読み聞かせ・保幼小の連携・見守り等々、協議会がうまくいくためには地域からの信頼が大切である。「形を作るよりもつながりをつくる」ことを大切にしよう。

提言②

楽しい学校・学級づくりを目指す 組織・運営の在り方と教頭の役割

ー帰属意識高める
トルネードマネジメントの実践を通してー

香川県丸亀市教頭会
丸亀市立南中学校

岡 野 隆 伸

【協議の柱】

教職員の帰属意識を高めるために副校長・教頭が
果たすべき役割「自立・協働・創造」



1 提言者から提案された成果と課題

・成果

学校評価では9割以上の教員が自校の教育活動の展開に肯定的な回答を行っており、本校では「南中プライド」による教員の帰属意識に高まりを感じるという記述も複数回答に見られた。また、若年教員の指導力向上や帰属意識の高まりが学校運営への参画意識にもつながり、各担当と教頭との連携にも良い影響が出ている。

・課題

今後は、各学校群の特色ある取組が、丸亀市全体の取組として、同じベクトルで進めていけるよう、教頭会からのトルネードを展開して、学校群における帰属意識の高場と地域連携の充実を目指し、協働体制の構築に努めたい。

2 グループ協議報告

自分たちの学校での帰属意識を高めるための役割として当事者意識を持ってもらう必要がある。先生自身のプランニング能力を高め、その際に自分自身が役に立っていると思えるように、教頭が働きかけている。私たちは数年で転勤をするが、ずっと今の職場で働き

たいと思える職場にすることが大切である。

学校の職員構成で、年齢が分断しているため帰属意識を育てる中で、個人それぞれの魅力を大切にしておいてOJTを進めることが重である。

3 指導助言

助言① 高知県中部教育事務所

所長 熊岡 彰 氏

帰属意識の話では、組織の一員として参画したいという思いを引き出すことが大切である。提言にもあったようにトルネードの話し合いやそれぞれの役割を意識した取り組みが大切である。管理職のベクトルが揃わないと、学校は混乱する。

うまくいっている学校での聞き取りでは、管理職ミーティングをしている。このミーティングを隔々に行き渡らせるラインを整理しており、各担当から、研究主任や学年主任に提案がなされている。ボトムアップの動きを作り、それぞれの会に意味を持たせることが大切である。

助言② 北海道札幌市立清田小学校

校長 稲上 敏男 氏

トルネードマネジメントの取組を教頭が中心となって進めたことは素晴らしい。どのように学校改善を進めたかではなく、なぜ進めることができたのか、職員からの信頼を、管理職が得ていることが大切である。難しいことは、動かし始め、納得や共感を広めることである。まず誰の力を借りるのが重要である。

課題意識を持っている先生・影響力のある先生が動き出すと一緒にやってみたいと思えるようになる。

誰の心に火をつけるのか、提言のように教頭先生の本気が必要である。自分がやったほうが早くても、あえて先生に指示をして任せることも大切である。

1
A1
B

2

3

4

5
A5
B

6

特
1特
2

提言①

教師の専門性を高め、学び続ける教員を
育てるための副校長・教頭の役割

ー鈴鹿市教頭会の取組からー

三重県鈴鹿市教頭会
鈴鹿市立大木中学校

伊藤 佳代子

【協議の柱】

人材育成における副校長・教頭の役割



1 提言者から提案された成果と課題

・成果

- ① 教頭通信発行の取組を行ったA中学校・ICTを活用した取組を行ったB中学校では、教職員アンケートの「この学校では 授業の工夫・改善を組織的にやっている」の項目で、それぞれ15・9ポイント、12・2ポイント市内平均を上回る結果となった。
- ② ICTを活用した様々な試みが、若手・中堅教員による提案の場の創出となり、会議等での活発な意見交換や提案につながった。
- ③ ICTの活用により、組織的に情報を伝達・課題・管理することができるようになったため、教職員が当事者意識をもってチームとして対応できるようになった。

・課題

- ① 先行的な取組を行ったA・B中学校の成果を分析・共有した上で、市内中学校10校全体に取組を広げ浸透させていくことが必要である。
- ② この取組を小学校に共有し広げていく。またその成果の検証方法について検討が必要である。

2 グループ協議報告

- ・若手とベテランをつなぐミドル層がないことが課題。教頭が相談しやすい雰囲気を作ることや教職員

をつなぐことで専門性の向上につながる。

- ・地域のサポーターやコーディネーター、SSWや外部講師等との連携や小中連携・近隣市町村との連携で学びをマネジメントすることが大切。

3 指導助言

助言① 青森県外ヶ浜町立三厩中学校

校長 目時 聖児 氏

教頭が教職員へ発信することが深い取組。タイミング・繰返し・適切な数を意識して継続するとよい。

ミニ研修は教職員のやりがいを感じるよい研修になり、ボトムアップとなる。教頭は多面的に関与するとよい。現勤務校のグランドデザインにはルービックキューブのイラスト。キューブの6面は教職員の提案で、教職員の想いをグランドデザインに載せている。

取組を広げることが課題に挙げられていた。アプリを使うと有益。各校教頭が得意な分野領域で専門性に着目しながら12通りの通信を発行するのはどうだろう。通信を発行することでミニ研修でも効果が期待できる。通信で自己開示したり失敗談を話したりして管理職への親近感をもってもらい、3Cを意識してこの取組を継続・発展してほしい。

助言② 高知市立はりまや橋小学校

校長 北岡 秀樹 氏

提言内容の教頭から教職員への発信は大変すばらしい実践。鈴鹿市の教頭会では学び合いがある。一人ひとりの質が向上し、学び続ける教職員につながる。組織として学び続けることが大切。そのためにボトムアップの促進を目指す。ミニ研修が効果的。担当に任せきりにせず、担当のモチベーションもアップできるとよい。

これから期待するのはウェルビーイング。校内巡視は教職員とのコミュニケーションをもつチャンス。学級での悩みを把握し、タイミングをのがさずサポートや声がけし、教職員が仕事を楽しめるようにしたい。

教頭は仕事量が多い。作成した「業務改善リスト」を参考に業務の効率化を進めてほしい。

提言②

学び続ける教職員集団の実現に向けた 効果的な副校長・教頭の関わり

ー互いに高め合う集団づくりを目指してー

徳島県三好都市副校長・教頭会
三好市立池田小学校

山田 知弘

【協議の柱】

学び続ける教職員集団を育成するための副校長・
教頭の役割



1 提言者から提案された成果と課題

・成果

- ① 意図的・計画的・継続的に副校長・教頭が研修に関わり、適切な指導助言を行うことで研修自体が活性化し教職員の力量形成に繋がった。またメンティとして研修に参加したことが副校長・教頭自身の力量形成にも繋がった。
- ② 学び続ける・高め合うといった目標を設定し、全教職員で研修に取り組む体制を構築することで、若手教員を育てる意識が浸透するなど教職員の意識に変容が見られた。
- ③ 副校長・教頭会で各校の実践研究を共有することで副校長・教頭の問題意識が高まった。

・課題

- ① 教職員一人一人の「強み」を本郡市内で共有するために、オンラインを活用した他校との合同研修ができるシステム作りが必要。
- ② 異動で教職員構成の変化があっても効果的な研修を継続できるよう研究を進める。

2 グループ協議報告

- ・ベテランの教員が研究授業を行ったり、一定の年次を過ぎた教職員がメンターになったりするとより学

び合う研修になるのではないかな。

- ・組織的にやっていることが見えてミニ研修とは違う。年度当初に全教職員が理解することがよい。
- ・各人の強みを教職員同士が知っていることが大切。

3 指導助言

助言① 青森県外ヶ浜町立三厩中学校

校長 目時 聖児 氏

現勤務校は多様なグループで研修・研究している。目指したのは弱音がはける職員室（諸富先生の言葉）。見せ合い授業を価値あるものにするため全教職員に参観シートを書いてもらっている。教育信条は率先垂範。管理職が率先して取り組む。研修へは副校長・教頭がアドバイザーとして参加する。

学校ごとに課題が違う。それぞれの課題に得意な先生が対応し、教頭会メンバーで考えるとよい。

人材育成とは育てることではない。育つ環境や機会をつくること。教頭発信やメンター会がその環境や機会になればよいと思っている。

助言② 高知市立はりまや橋小学校

校長 北岡 秀樹 氏

サークル型メンター制度は成果が大きく、参考になる。先輩から若手につなぐという機会がなくなっている今、若い職員を学校組織で育てる大変有効な実践だ。教職員から支えてもらっているという感覚が若い職員の自己肯定感を向上させ、ベテラン教員もやりがいを感じるができる。

また自分たちの学校の研究テーマにあっているか確認することも大切。みんなでアップデートしなければならない。校長が1番にアップデートすべき。

育成する立場の人が最も育つ。教頭先生の雰囲気で学校の雰囲気が育つ。目配り気配り心配りが大切。一人一人が意欲的に学ぶ職場にするために、自ら「やりたい」と思った先生の意志は必ず尊重する。

1
A1
B

2

3

4

5
A5
B

6

特
1特
2

提言①

教職員の指導力向上をめざして

－教職員の専門性を生かす校内体制づくり－

滋賀県長浜市教頭会
長浜市立塩津小学校

兼 房 広 明

【協議の柱】

個々の専門性を生かした協働体制を構築するための副校長・教頭の役割



1 提言者から提案された成果と課題

・成果

若手教員は、ベテラン教員の実践をそのまま取り入れるのではなく、アレンジして行うなど前向きな姿勢が見られてきた。

意図的に若手教員とベテラン教員が協働する中で、コミュニケーションが生まれるような職員室経営に繋がっている。全教職員に一体感が感じられるようになり、様々な困難な場面においても、助け合える風土を築くことができた。

本校の実践を長浜市の教頭会で報告し、各校のOJTの取組を情報共有する中で、長浜市教頭会のつながりにも発展している。

・課題

小規模校では、校務分掌を複数持つが、軽重のバランスの見極めが大切。教頭として、職員室の担任として、俯瞰して全教職員を観察し、明るく風通しの良い職場づくりに努める必要がある。

長浜市教頭会においては、OJTを核とした若手育成を行うため、教頭の役割について焦点を絞って協議し、どの学校にも活かせる研究を進める必要がある。

2 グループ協議報告

塩津小の発表より、校内研究の持ち方やOJTを

スムーズに進めていく中で、個々の教職員の個性を尊重するとともに、教職員の強み弱みをどう伝え、どう捉えるのか、副校長・教頭として視点を持つ点が重要であると感じる。

校内体制づくりにおける時間を、どう確保していくのか。放課後などの短い時間帯を利用したり、ICTを活用したりして、教職員が学ぶ場を設ける工夫が必要である。

3 指導助言

助言① 高知県教育センター

教職研修部長 古谷 典子 氏

学び合う教職員集団をどうつくるか、若手とベテランという二極化が進む学校が多い中、教職員同士が関わり合い、学び合う場をどう設けるのか提言していただいた。副校長・教頭として、存在そのものが有益で有用でありたい。また承認し、個々の教職員の潜在能力を引き出す立場として、力を発揮していかなければならない。

「目配り 気配り お菓子配り」という言葉が最後にあった。先生方への個別の働きかけや助言は、管理職が考えるよりも大きな意味を持つ場合が多い。学び合う組織から学びたい組織になるような取組を、提言者の「信じて任せる姿勢」から学ばせていただいた。

助言② 埼玉県春日部市立緑小学校

校長 矢野 渡 氏

学校体制づくりが難しく、ベテランにしわ寄せがいくところを、うまく機能するように工夫されていた。校内の全教職員が関わり、複数年にわたる研究を実践されている。

副校長・教頭として、先生方の授業や学級経営を見る機会は多いと思われる。先生方を本当に把握できているのか、自問自答しなければならない。適切な指導や助言は、先生方を正しく理解したうえでこそ成り立つ。

ベテラン教員の減少で、学校文化の継承が難しくなっている学校が多い中、若手同士で学び合う体制をつくることも大切。本提言より、実践で取り入れることのできるものを取り入れ、アレンジして自校での効果的な実践につなげてほしい。

提言②

メンターチーム会を活用した 活力あるチーム学校づくりの推進

ー若年教員の指導力向上を目指した
教頭の役割についてー

高知県土長南国支部教頭会
大豊町立大豊学園

溝 渕 幸 声

【協議の柱】

学び続ける教職員集団を作るための教頭の役割
について
～組織的・協働的なチーム学校づくりの推進を通して～



1 提言者から提案された成果と課題

・成果

メンターチーム会での取組を通し、若年教員が先輩教員や研修コーディネーター、管理職からの助言をもとに日々の実践を行い、チーム学校の意識が醸成されてきた。メンターチーム会が相談できる貴重な場となるとともに、学校や校種間を超えた結びつきも生まれ、本地区における人材育成にも寄与している。また、教頭は研修コーディネーターと連携し、全体を俯瞰する立場で校内メンターチーム会に関わることにより、若年教員の個々の状況を把握しサポート体制づくりを進めることができた。メンターとの関わりを通して、中核教員の育成にも繋がり、それぞれの強みを活かして若年教員とベテラン教員が共に学び成長できる教職員集団となりつつある。

・課題

各校、年々若年教員が増加している中で、メンターチーム会等の校内OJTシステムをいかに持続可能な体制にしていけるかが課題である。教職員の校内業務の精選を図ることで、メンターチーム会を充実したものにすの時間の確保をしていきたい。

2 グループ協議報告

・情報共有が自然にできる職場になることで、授業や学級経営はもちろん、若手が見ぬかっていたことを別の先生が見つけるなど対応力が強化されている。

- ・教頭としての関わりは何が大事か。指導だけでなく、任せる中で達成感や自己肯定感を持たせていく。
- ・学び続ける教職員集団を作るため大切なのは「繋ぐ」こと。校内を繋ぐ、外部と繋ぐ、退職教員と繋ぐ。電話で相談にのる、教科エキスパートが相談にのる。外部講師として退職校長と繋ぐ。幼小中を繋ぐ。組織的・協働的にチーム学校づくりを行っていることが大切であり、若年のニーズにあったものや、個々の得意分野を生かしていったりすることが重要。また、教頭が時間・環境・組織をつくることが必須。分からないときは協議して周りを頼ることも必要である。

3 指導助言

助言① 高知県教育センター

教職研修部長 古谷 典子 氏

大豊学園のメンターチーム会の実践は、高知県あけでの取組であり横浜市の取組をモデルとしている。この仕組みを取り入れた背景には、教職員の大量退職に伴う初任者の急増により効果的な教育技術の研修や経験の浅い若年教員を、校内で育てる仕組みづくりが求められたことにある。発表により、活力ある学校づくりの推進、成果のモデルが示された。特に成果としては、価値のあるメンター会の広がりである。その先駆けとなったのが土長南国地区であった。また、教科の専門性という部分では、整合性をもったリーダーの取組を広げる効果もあり、合同メンターチーム会とあわせて、メンティー同士の繋がりが増え、メンターのネットワークが盛んになることにより、早期の退職を回避することにも繋がっている。

助言② 埼玉春日部市立緑小学校

校長 矢野 渡 氏

メンターチーム会の取組は、高知県では県全体での取組として行われている。近隣の学校と連携してできるか等自校では難しいと思われることでも、類似の取組やメンター会の内容で実施できることがあれば、提言を参考にさせていただくと良い。

地域の教頭会がメンターチーム会に参画し、横の繋がりを確立し広がりを持ち進められていることが大きな成果であり、工夫された取組である。若年が必要なスキルを身に付けるために安心して何でもベテラン教員に相談し、日々の不安を取り除く場、それがメンターチーム会である。ちょっとした雑談から、課題を得ることができる貴重な時間。経験が少なく、何が困るか自分でも分からない。それを承知のうえで、整理し構築するのが教頭の役割である。

1
A1
B

2

3

4

5
A5
B

6

特
1特
2

提言

学校の組織マネジメントを
推進する上での副校長・教頭の役割

全公教総務・調査部

環太平洋大学 教授

堀 口 靖 之

浅 野 良 一 氏

【協議の柱】

勤務校における教職員の勤務の実態や働き方について

勤務校における人材育成について



主な提言内容

○学校の組織マネジメントを推進する上での副校長

・教頭の役割

- 1 全国教頭会アンケート結果の報告
- 2 講演及び指導助言

講演

多忙を克服する校内での人材育成

環太平洋大学 教授

浅 野 良 一 氏

- ・校内での働き方改革の進め方については、場をいかに設定するかが大切。転勤があるので、関わり合いの中で進めるのは難しい。
- ・メンター制等が導入されると会議が増え、働き方改革に逆行するのではと意見が出されたが、時間を区切って時間内に終わらせることが大切である。

1 グループ協議報告

- ・先生方の時間の確保→ 会議の精選 早く返す日を作る。早く来て、早く帰る。これも超過勤務ではないか。
- ・勤務時間が校務支援システムで見える化できるという。
- ・仕事が多岐に。不登校・外国の児童への対応等。
- ・働き方改革は、進んでいる。短くなる。ペーパーレスが進む。
- ・若手教員の支え方。自主研修、メンターの進め方。
- ・早く帰ることができているところもある。ベテランの多い学校は、モチベーションの保ち方が大切。
- ・ベテランが多い学校と若い人の多い学校。協力してすすめる。それぞれの年代の立場で進める。
- ・校務支援システムの見える化。遅い方への声掛け、帰る時間の自己決定。ノー残業の設定。人を配置してほしい。
- ・若い先生とは、進捗確認し進む。ピンポイントで。
- ・改革進む。勤務時間短くなる。人材育成、若い方の育成は難しい。なぜやるのかを理解してもらう。
- ・個人的な人を増やす。仕事を減らす。日課の見直し。勤務時間の削減
- ・若手に仕事を。転任前に、支える人を用意する。
- ・自宅への持ち帰りが脱却できない。→デジタル化、教育課程の見直し。職員室の座席換える。対話を行い関係性を高める。
- ・教頭の勤務時間が長い。ベテランが帰らない。若手は要領が良い。タブレット・ペーパーレス化。
- ・がんばっている先生に声掛けをする。→早く帰る
- ・メンター制→悩みを聞き道德の時間に。時間の確保
- ・授業研以外に講師からの話を聞く。積極的にコミュニケーションとる。→人材育成につながる。

2 指導助言

助言 環太平洋大学

教授 浅野 良一 氏

- ・生み出す成果を向上させるには、人を少なくし、セキュリティ、楽しく、正しく、早くを大切にする。
- ・不要不急なことをしない。
- ・職員室はゴミが多い。探す手間がいる。整理・整頓・清掃・清潔・美を心がける。

テーマ

誰一人取り残さず、個々の可能性を最大限に
引き出す教育の推進に向けた教頭の役割

—個別最適な学びと協働的な学びの
日常化を図るための教育のDX化に向けて—

東京学芸大学教育学部・教授 博士（工学）

高橋 純 氏



1 講演の主な内容

今、求められている変化は見た目の変化ではなく、考え方・概念の変化であり、「何のためにやっているのか」「本当にできるというのはどういうことか」ということを追究し、自分の自己実現やウェルビーングの実現に向けてどのようにデジタルを使っていくかを考えていくことが重要である。

先進校では子どもたちは自分のペースで高速で学んでいる。自分で情報を収集して整理分析をし、仮説を立ててインターネット等で調べ、発表用のスライドにまとめる。自分の意見を表現し、他者の意見を聞いて理解して、解釈する。先生に聞きたい子は先生に聞く。情報を頭に入れて解釈し、それを吐き出すという学びを連続して行っている。振り返りの量も格段に多い。

教員方の研修を自主的、自律的にする。例えばチャットルームを作って、自分のおすすめの研修をいつでも投稿し、自由に共有する。作成中の指導案はURLに入れて常に更新したものが見れるようにするとよい。

紙の文化からスクリーンへ、文字から動画へと、既存の枠組みは崩壊し、社会が劇的に変化している。適切なテクノロジーを使って適切なルールで適切に研修をしていく。また新しい環境を導入するときには、本質的な活用をしているか、正しい技術か、そのルールは新しいかという3つの観点で検討をすることが重要である。

2 グループ協議報告

- 自由進度学習をすることで、先生が子ども一人一人を主語にして見るできるようになった。
- 校務DX化によって、職員招集を減らしている。
- ICT支援員の配置を要望し、環境を整える必要がある。
- 教頭も学び続けて持続可能な学校にする。
- 先生方が授業でどんなソフトを使っているか把握しないといけない。
- 一人一台の端末によって特別支援の児童生徒の参加も可能になる。
- 複線型授業に挑戦しているが、「もう少し教えてほしい」という子どもの声や保護者の声もある。授業に対する理解を深めてもらうように働きかける。
- ベテランの先生も含めて全体の認識を変えていく。
- ICTを使いこなす力も大事だが、最低限身につけないといけない力もきちんと指導する。

3 指導助言

○「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」をラーメン屋で例えると・・・

- ①家族で別々のラーメンを注文（個別最適）
- ②感想などを交換しながら食べる（協働）
- ③一人で食べるより、全員で同じラーメンを食べる方が、楽しめるし、ラーメンを深く知ることができる。

※「家族のだんらん」「楽しく腹を満たす」という大目標が重要（個別や協働、ラーメンは手段）

こういう考え方を取り入れてチャレンジしていく。

○授業づくりの考え方

- 子ども一人一人が主語←大きな理論
- 協働は自分のペースで。いい相手、いいタイミングが大事。
- 白紙の段階からURLで共有する。（指導者もどの段階でつまづいているか把握できる。）
- 「端末＋問題解決的な活動」では、個別も協働も一斉に起こる。
- これまでは平均的に指導、または個人から全体で練り上げていた。今は個別に指導。先生は忙しい。

1
A

1
B

2

3

4

5
A

5
B

6

特
1

特
2

テーマ

少子高齢化の地域における
チーム学校づくり

ー中山間地域における
地域とともに取り組む学校づくりー

講演 1

高知県の町立伊野南小学校 校長 川上 確也氏

講演 2

周南公立大学 教授 清原 泰治氏



1 講演の主な内容

講演 1

高知県は中山間地域率が93%である。学校・家庭・地域のつながりの中で子どもたちは成長をしているが、そのつながりの軸となっているコミュニティスクールと地域学校協働本部、そして地域コーディネーターの役割が、子どもの成長において大変重要となる。

子どもたちが地域との交流から得られるものとして、自尊感情・コミュニケーション力・学力が挙げられる。地域との交流の中での自然体験から、人間関係能力・探究心・自己肯定感の高まりも期待できる。

★中山間地域学校での体験学習：いの町立川内小学校の事例紹介

- ・収穫体験（ぶどう園、芋掘り、焼き芋）
- ・米づくり（田んぼでの運動会、脱穀体験、精米）
- ・森林体験（林業体験学習、工作）
- ・防災学習（保護者との炊き出し、着衣水泳）
- ・出前授業（水質調査、バレエ団ワークショップ・演劇教室・バレエ団講演、ミニプラネタリウム体験、技能実習生との交流、ウミガメとの触れ合い体験、折り紙体験）
- ・社会科見学（消防署見学、和紙づくり）
- ・川内まつり（体験コーナー）
- ・海外との交流（タブレットを活用した交流、外国語を1年から学習）
- ・ことばの力育成（ノート指導、朝の音読・暗唱）
- ・本に触れる（読み聞かせ、辞書引き、教員からの

本の紹介、図書バス、図書館司書来校)

講演 2

中山間地域をどうやって守るのか考えなければならぬ。そのために地域と大学が連携する必要がある。連携には、地域の願いを聞き、活動を仕組んでいくといった、地域と大学が共に生きる協働関係となる「域学共生」への変化が必要となる。

また、地域の人的財産をどれだけ知ることができるかも大切である。地域の方は「実務家教員」と考え、地域とつながり、共に力をあわせていくことが重要である。

地域の温かさを知っている学生が、地域を守る人間になる。それこそ確かな学力である。そういった人間を育てていくことが大切である。

2 グループ協議報告

講演 1

コロナ禍で、地域との関係が希薄になり、体験活動も減ってきた。

地域の推進員が高齢化しており、次の担い手探しに苦勞している。地域の若い人たちをどのように巻き込んでいくかが課題である。

志を持たせるには、体験活動が必要だとは思ふ。

教員の年齢構成上難しい点がある。今後、教員をどのように育てていくか課題である。

忙しくて、若年教員スキルアップに時間がかけられない。長期休暇の活用や年間を通した計画が必要である。



講演 2

実務家教員を有効活用したい。

学校の課題は学校内だけでは解決できない。異動がある中で、この取り組みをどのように持続していけばよいのだろうか。

仕組みづくりが大切だ。地域の人にコーディネートしてもらう必要があるし、そうすることで教員が代わっても続いていく。

コロナ前は大学と協力して地域学習ができていたが、今では減ってしまった。

教頭は短い任期で学校を代わってしまうが、学校の要として清原先生から学んだことを生かしていきたい。

管理職が代わっても大丈夫のように、地域コーディネーターの仕組みづくりをしていきたい。

地域と共に子どもの成長を見守っていく仕組みづくりが必要だと思った。



茨城大会紹介

来年度の「第 67 回全国公立学校教頭会研究大会」は、令和 7 年 7 月 31 日(木)～8 月 1 日(金)の 2 日間、茨城県水戸市で開催いたします。

水戸といえば、水戸藩 2 代藩主徳川光圀公が水戸黄門として有名ですが、9 代藩主徳川斉昭公が開設した弘道館は、日本最大規模の藩校として、幕末から維新にかけて活躍した吉田松陰をはじめとする、多くの人々が全国から学びに集った地としても知られています。江戸から明治へと世の中が大きく変わった先の読めない時代に、どう生きるべきか、日本はどうあるべきか、水戸に来て学び、議論し合った地でもあるのです。

現在、人工知能(生成AI)や、ビッグデータ、Internet of Things(IoT)、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来しつつあります。社会の在り方そのものがこれまでとは「非連続」と言えるほど劇的に変わる状況が生じつつあり、社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となってきています。ほかにも少子化による児童生徒数減少やそれに伴う学校の統廃合の問題、教師のなり手不足、長時間勤務、休職者の増加を含めた教員不足の問題など、教育現場を取り巻く問題はたくさんあります。このような時代をたくましく生き抜く人財を育てるために私たち副校長・教頭は、教員の資質向上や労働環境の整備、地域資源の活用などに取り組み、活力ある学校を運営して行くことを求められています。これらの課題や解決方法について、かつての志士のように、全国の皆様と水戸の地を舞台に議論しませんか。

茨城県は、ブランド総合研究所の「都道府県魅力度ランキング」において、毎年のように最下位を争っています。しかし、本県は魅力がないわけではありません。豊かな自然に恵まれ、農水産業が盛んで、広い土地では工業生産も盛んに行われ名産品もたくさんあります。筑波山、偕楽園、ネモフィラやコキアで有名な国営ひたち海浜公園など、これを機に全国の皆さんに茨城県を知っていただき、魅力に気付いていただけたら幸いです。同じように、教員もブラックで魅力のない職業として話題になっていますが、私たちは教師の魅力をたくさん知っています。第 13 期 3 年次にあたる茨城大会のサブテーマを「郷土を愛し 協働して未来にはばたく人財を育む 活力ある学校づくりの推進」としました。子どもたちも、教師も協働して共に成長できる、活力ある学校づくりのために、共に学んでまいりましょう。来年度の夏、全国の皆様と茨城でお会いできることを楽しみにしております。

実行委員長 安 齊 寛





高知大会を振り返って

令和6年7月31日、8月1日に開催いたしました、第66回全国公立学校教頭会研究大会高知大会兼第42回四国地区公立学校教頭会研究大会兼第50回高知県小中学校教頭会研究大会の開催にあたり、全国から多くの会員の皆様にご参加いただき成功裏に終えることができました。誠にありがとうございました。

今大会も、より多くの会員の方が参加できるようにと、参集型とオンライン型を併せたハイブリッド型で開催しました。おかげさまで、両日とも約3000名（参集約1300名、オンライン約1700名）の皆様にご参加いただくことができました。

振り返れば、大会1日目の安藤桃子氏の記念講演では、「想像と創造～地球のこどもビジョン～」という演題で、映画監督としてのご経験や高知に移住されてから子どもたちとの触れ合いを通して地域と繋がり、地域と共に自らの力で未来を切り拓く子どもたちを育成するための学校教育の役割等、魅力ある学校づくりに向けて大いなるご示唆をいただきました。その後のシンポジウムでは、露口健司氏をコーディネーターとして、藤原文雄氏、田村千賀氏、谷智子氏の4名の有識者の方々に、学校の教職員だけでなく、子ども・保護者・地域の皆がウェルビーイングを達成するための組織の在り方、働きがい等についてそれぞれの知見から分かりやすくお話いただき、これからの学校運営について副校長・教頭としての役割を具体的に考えることができました。

また、2日目は、参集とオンライン参加を併せたハイブリッド型で行った10の分科会別協議会で、私たち副校長・教頭の抱える教育的諸課題に対して、全国の会員による実効的かつ具体的な提言をもとに協議を行うことができました。協議にあたっては、それぞれ参集グループ、オンライングループで協議をし、それらの協議内容を全体で共有し、活発で有意義な協議ができたことは、本大会の大きな成果の一つであると感じております。

今後、本大会で得られたことを各地区に、各校に還元していただければ幸いです。

末筆ながら、今後の皆様方の一層のご活躍を心より祈念しております。

第66回全国公立学校教頭会研究大会高知大会 実行委員長 大坪 顕彦



会章のいわれ

円は教頭会のまとまり、協力、発展
教は教育の教と教頭の教
8本の線は全国8ブロックを意味し、
中央の段違いのアクセントは
教頭の自覚を促すことを希っている。

Designed by
元茨城県真壁町桜川中学校教頭
塚本 武治氏

第66回 全国公立学校教頭会研究大会
第42回 四国地区小中学校教頭会研究大会
第50回 高知県小中学校教頭会研究大会

高知大会集録

令和6年10月23日発行

編集人兼発行人 全国公立学校教頭会会長 松野 博文
高知大会実行委員会委員長 大坪 顕彦

発 行 全国公立学校教頭会
〒105-0002
東京都港区愛宕1丁目6番7号
TEL 03-3436-4868 FAX 03-5425-2788

印 刷 所 株式会社 伸光堂
〒780-8040
高知県高知市神田638-24
TEL 088-834-3434 FAX 088-834-3403

